

## 合格間違いなし！の『テスト』で、安全？

2011.10.16 記

日本全国の原因が（女川・福島・東海は3.11地震で。それ以外は定期検査のため）続々と停止する一方で、福島原発事故を受け、運転再開の目処が立たない状況が続いています。

その“窮状”を救うべく政府が打出したのが『ストレステスト』（7.21 保安院『実施計画』）で、多数の原因を抱えるヨーロッパで安全性を見直すために提案された『ストレステスト仕様書』を日本でも実施し、「（2段階での）原因の安全余裕の評価」を行なうものです。

「一次評価」は、定期検査が終了して「起動準備の整った原子炉」1機毎が対象ですから、「テスト合格」という“お墨付き”を与えて運転再開させるためのものであることは明らかです。また、女川原発なら1～3号機全てというように「発電所単位で実施する」という「二次評価」は、福島事故で欠陥が明らかとなった津波・電源対策などを実施した後の発電所全体に対する評価を行なうもので、「事業者からの報告の時期は本年内を目処とする」とされていますので、運転再開への道を複数号機一度に、しかも年内に確保したい国や事業者にとって、都合のいいものになっています。

肝心のテスト内容ですが、『実施計画』には一次・二次ともほとんど同じ文章が記載されており“間違い探し”が大変でしたが、要約すれば、福島事故で注目された「地震・津波」と「全交流電源喪失・最終的な熱の逃し場の喪失」という想定を超える事象に対し、一次評価では「安全上重要な施設・機器」の設計値・許容値が「どの程度の裕度を有するか」を確認し、二次評価では、危険が生じる限界・弱点（クリフエッジ）を特定して、最終的にどの程度の事象まで「燃料の重大な損傷」が生じないかという「安全裕度（耐力）」を発電所全体で総合的に評価する、というものです。

でも、地震に対する裕度は既に基準地震動  $S_s$  に対する解析で確認されているはずですし、津波・電源対策は福島事故後の防潮堤のかさ上げ計画や追加のシビアアクシデント対策などで一応策定されているはずで、すでに“答え”が出ているのですから、合格するのは最初から明らかです（それこそ「やらせ」です）。また、なぜ二次評価を「発電所単位で実施する」のか筆者には理解できませんが、電源設備や復旧資材・人員を複数号機間で共用することをプラス評価して、合格させ易くするためでしょうか。しかし、福島事故では、4号機爆発は3号機由来水素が原因とも言われていますし、1号機爆発で2号機原子炉建屋のブローアウトパネルが外れたり（結果的にはプラスでしたが）、水素爆発によるガレキ散乱や高放射線量によって電源復旧などの迅速な対応が妨げられたというようなマイナスの影響が多く見られていますが、それらを“正しく評価”できるのか疑問です。

また、シビアアクシデント・マネジメントの二次評価では「ハードウェアのみならず、手順書、組織体制の整備などソフト面について考慮する」としていますが、福島事故での（墨塗り）手順書や実際の操作・復旧対応の適否などのソフト面の検証が全くなされていない現状では、評価を適切に実施することは不可能だと思います。さらに、『安全審査指針類』や安全規制行政の抜本的見直しもないまま、『安全神話時代』の基準・体制で評価を行なうこと自体、無意味です。しかも、シビアアクシデントは、航空機墜落や（手順書非公開の根拠に東電が挙げている）核物質防護上の原発テロなど、「テストの出題範囲」を超えた“想定外”事象によっても生じる可能性があるため、「やらせテスト」に合格しても、本当に安全を確保する能力があるという証明にはなりません。

\*ちょうど『原子力資料情報室通信 448号（2011.10.1）』でも「ストレステスト批判」が掲載されましたので、興味のある方はご参照下さい。